

森林利用 I

森林とコミュニティの再生

日時：平成23年9月24日（土） 10:00～15:00

講師：高野 雅夫（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

概況



◎森林とコミュニティの再生

1. 座学

3月11日に東日本大震災が発生し、日本は悲劇に見舞われた。政府は、原発からの距離で避難地域を設定したが、実際は、風の流れなどにより、原発からかなりの距離にある地域においても高い放射線量を記録している。政府は、放射線量についての正確な情報を国民に公開するとともに、それに基づいた対策（避難勧告など）を講じるべきである。

今回のような地震が起きることは以前から想定されており、十分な対策を講じれば被害は最小限に防ぐことができた。「想定外」の大地震であったと称されるが、実際は、「未想定」の大地震であった。

・成長の限界(D. H. Meadow)のモデル

2020年くらいを境に、地下資源、工業生産、一人当たりの食料は、減少に転じ、それにより人口が減少し、平均寿命は低下する(子供の死亡率の上昇が原因)。人間は、豊かな生活を追い求めれば追い求めるほど、自らの首を絞めることとなる。だからこそ、今は持続可能な社会が求められる。成長型社会 → 持続不可能。生態系の中で生きる社会 → 千年持続可能。

・持続可能な社会を目指す

戦前は、農山漁村がうまく機能しており、持続可能な社会が形成されていたが、高

度成長期以降は、農山漁村が十分な機能を果たせなくなり、持続可能な社会が崩れていった。

今後、持続可能な社会を目指すためには、木質バイオマス、マイクロ水力発電、バイオガス等の活用が必要となってくるだろう。

・すげの里～中山間地における自然エネルギー自給の暮らしへのチャレンジ～

- ①建物本体：高断熱、土壁による大熱容量、地中熱利用
 - ②太陽光発電(売買電) → 電力自給にチャレンジ
 - ③ウッド(薪)ボイラーによる給湯と床暖房 → 地域の間伐材を利用
 - ④マイクロ水力発電 → 獣害よけ電気柵の電源
 - ⑤バイオガス → 家畜の糞尿を燃料と肥料に
- 自然エネルギーを有効活用することで、自給生活を送ることができる。

中山間地住民と都市住民との新たなコミュニティの芽生えが、限界集落の再生や耕作放棄地の減少へと繋がっていく。

2. コミュニティについての討議

討議の基本ルールは、「①何を話してもよい。②何を聞いてもよい。③言いたくないことは答えなくてよい。」の3つ。受講生が輪になり、大震災・原発事故について思うことを活発に話し合った。